

森は水の源(みなもと) 水は命(いのち)の源 川は命のつながり

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する木曾川・飛騨川・愛知用水の交流を

第14回総会と“まちづくり”と“つながり”の木曾川上下流交流・連携の集いを開催

みん・みんの会は第14回総会と“まちづくり”と“つながり”の木曾川上下流交流・連携の集いを2024年12月7日に、名古屋市北区の「ソーネ・おおぞね」で行いました。総会では①2023年度活動報告②2023年度会計報告(収支決算)③「木曾川流域水源の里基金」の報告と今後の運用④2024年度活動計画 ⑤2024年度予算などを報告・提案し、承認されました。今日まで、皆様のご支援・お力添えをいただきながら、木曾川流域の上下流交流・連携を取り組んできました。皆さん、これからもよろしくお願ひします。

交流・連携の集いでは、パネラーの田中憲二さん(元長久手市建設部長)は長久手市の職員時に、上流の南木曾町と「水を通じた命の交流」として2006年に友好提携を結んだ経緯や愛知万博での取り組み内容について話されました。みん・みんの会の河崎からは、暮らしている地域での川や水をめぐる取り組みや子どもたちとの「生物多様性」「川は命のつながり」のやりとり、団地での太陽光発電をめぐる事業者や行政、国とのやり取りなどについて話しました。

集いの結びに、「被曝2世」である杉戸孝さんから、2025年がヒロシマ、ナガサキから80年になることや「二度と戦争を起さない」「核廃絶」の思いなどが話されました。“被爆者のもう一つの強い想いは「ノーモア・ウオー(二度と戦争を起さない)」である”という杉戸さんにつながっていきたい。

集いの流れと前後しますが、パネラーの海道清信さん(名城大学名誉教授)からは、「1、震災復興と地域のレジリエンシー(住み続けられる真の強靱性)」「2、地域における公共交通の役割」「3、バルセロナ・スぺリアモデル—公共空間の人間化」について、パワーポイントを使いながら話されました。特に、「1、震災復興と地域のレジリエンシー」での財政制度等審議会・財政制度分科会におけるコンパクトシティ論議—財政効率化をねらいとしたまちづくり戦略は地域の暮らし・文化や人々の思いを重視しない—、「地方消滅」か「農山村は消滅しないか」、「農山村(疎)の意義」「これからの農村政策にもとめられること」「小さな拠点」とは…、など、私たちの課題・問題意識である『水』『木曾川上下流交流・連携』『都市部と農山村地域との流域交流や連携』『関係人口』などにとって、示唆に富んだ問題提起がありました。

今回の「会員だより」に、海道さんから下記の文書を寄せていただきました。(事務局 かわさき)

農山村と都市の居住地のかたち

～豊かな国土のあり方、地域のあり方は、各地域での暮らしの伝統文化に誇りと

愛着を持った取り組みの中に、見いだせる～

海道 清信(名城大学名誉教授)

私の専門分野は都市計画ですが、大学時代からの友人の故中島熙八郎さん(熊本県立大学名誉教授)のことを紹介したい。彼は「農山村のことがわからないと都市はわからない。農山村が大事なんだ。農山村があって都市があるんだ」と盛んにまくし立てて、我々研究者仲間でも変わったやつだなと思われていました。彼は昨年急逝しましたが、その追悼文集には、住民と共に川辺川ダム建設反対の実践活動、調査研究の足跡が収録されています。源流の村でもある五木村の村づくりについて、「五木村の地域資源の要は山であり、人です。山が整えば水が良くなり、川も良くなります。そして、その仕事を担うのが山里暮らしの知恵と技を持つ五木村民だからです」と、都市とは異なる暮らし、地域のあり方を鋭く指摘しています。

都市計画行政では、将来像として都市計画マスタープランを作成します。近年はそれを補完するために、立地適正化計画も策定されています。そこで描かれる都市モデルは、判で押したように国土交通省推奨の「コンパクトシティ+ネットワーク」です。小田切徳美氏が『農山村は消滅しない』(岩波新書2014年)で、正しく指摘しているように、欧州のコンパクトシティの概念には農村からの撤退という要素は含まれていませんが、日本では財政負担の軽減による効率化をめざして、「農村たたみ論」の論拠としても使われています。能登半島地震(2024年)の復興に当たっても、コンパクトシティを論拠として集落の集約化を

推進すべきだとの論議があります。しかし、これは逆立ちした議論としか思えません。ある研究者（南部哲宏氏）は、21世紀は「疎の時代の価値観」が重要だと指摘しています。また別の研究者（山崎寿一氏）は、かつての能登半島地震（2007年）の復興過程を調査して、予想もしなかったような農村集落コミュニティの再生、そしてレジリエント（住み続けられる真の強靱性）な地域の力があることを発見しました。

本当に豊かな国土のあり方、地域のあり方は、それぞれの地域での暮らしの伝統文化に誇りと愛着を持った取り組みの中に、見いだせると思います。そうした取り組みは、農山村と都市との交流の中でも見いだせると思います。

「支援する／される」でなく、私たちが「学ばせてもらっている」

名古屋生活クラブと能登・高屋の人びととの関係、つながり

1976年珠洲市高屋に関西電力の原発計画が持ち上がった当初、住民は一つになって反対した。しかし関電の懐柔策で、高屋は賛成派と反対派に分断された。反対派リーダーだった円龍寺住職の塚本真如さんは、自身も賛成派等による誹謗中傷にさらされながら、仲間たちに「絶対に賛成派の個人攻撃をしてはならない」と言い聞かせた。

1979年スリーマイル島原発事故、1986年チェルノブイリ原発事故を経験した日本では、脱原発運動が空前の盛り上がりを見せた。だが、高屋では運動が激しさを増す中、反対派は生活の糧を失っていった。農家の板谷さんもその一人だ。名古屋生活クラブの伊澤は、配達を終えたトラックで一路高屋を目指して夜道を走り、現地で板谷さんのスイカを収穫し、トラックに積み込んで、名古屋の支援者に配達して回った。高屋の人たちの生活を必死になって支えた。2003年関西電力は計画凍結を表明した。原発は過去のものとなったかに見えた。

2024年1月1日、能登半島地震が高屋を襲った。震源は他でもない高屋付近だった。もし原発が計画通り動いていたらと思うと、高屋の人たちには感謝しかない。

3月名古屋生活クラブは加賀市のホテルに避難した高屋の人たちを訪ねて、見舞金をお渡しした。塚本さんは、かつての反対派も賛成派も分け隔てなく、見舞金を平等に分配された。

名古屋生活クラブは地震直後から、被災された高屋の人たちの支援に取り組んできた。会員から義援金を募るとともに、金沢や能登の商品の売上の一割を義援金として積み立ててきた。総額は380万円余りになった（2025年1月17日現在）。

義援金に示された会員の皆様の思いを高屋の人たちに伝えること、また高屋の人たちの思いや被災地の



現状を会員の皆様に伝えることが使命だと考えている。そのために8月に2回、10月と12月に各1回、計4回有志が高屋支援ツアーをおこなった。取引先様からお預かりした支援物資を「バン」に満載して現地を訪ね、炊き出しを行った＝写真。

倒壊した家々、白く隆起した海岸線、折り重なった流木…被災地の圧倒的な現実を目を背けたくなくなった。しかし高屋の人たちは、炊き出しの会場に大勢詰め掛け、支援物資をありがたそうに受け取り、帰り際には手を振って見送って下さった。塚本さんは「支援物資を届けにわざわざ名古屋から高屋に来てくれたことを、高屋の人たちは本当に感謝しています」といって下さった。救われた思いがした。「支援する／される」という非対称な図式でなく、私たちが「学ばせてもらっている」のだと思

った。これからも能登支援を継続していきたい。（名古屋生活クラブ 杉原）

「能登半島の自然を守って真っ当な生き方をする」

～名古屋生活クラブ・生産者大交流会が行われる～

2月8、9日、名古屋生活クラブ生産者大交流会が刈谷市産業振興センターにて開催され、み

ん・みんなの会もマルシェに参加しました。全体で約50のブースが出店し、私たちの隣には小池

糰店のブース。今までも名古屋生活クラブで「木曾川流域水源の里基金」に関わる木曾の製品である「赤かぶ漬け」「すんき」「ひのきオイ



ル」「ひのきスプレー」「水源水」と私たちが作り出した「木曾川流域図」「エコバッグ」「木曾五木ポストカード」の販売に取り組みました。

木曾からの製品は小池糰店の唐沢さんが集荷から集計、返却、売りきれなかった商品の買い取

りまで、何から何まで助けていただきました。

この日は強い寒波の影響で新幹線などの交通機関の運行が乱れ、講演者のプログラムが入れ替りりましたが、生産者や会員の本音の対話のやり取りがありました。

木祖村で、地域おこし協力隊のメンバーである丸山さんは「中山間地域で耕作放棄地をそのままにせず、畑としてよみがえらせていくことは、単に食料を生産することではなく、地域の人びとの心を支えることにもなっている」「これからもどんどん耕していきたい」と力強い発言がありました。

珠洲原発に反対して計画を断念させた戦いを担った塚本真如(まこと)さん=写真=は「能登半島に生きる私たちを国は切り捨てようとしているが、この自然を守って真っ当な生き方をする」と国に対する怒りとともに諦めず進む決意を語っていました。(事務局 近藤)

木曾青峰高校インテリア科5人の女子高校生

「五人五色」、子どもたちや親子がワクワクする作品づくり

2025年1月17日(金)午後2時に、名古屋市科学館・山田さん、木曾広域連合地域振興課・下野さんとともに木曾青峰高校インテリア科に行ってきました。前回訪問したのは昨年6月14日でした。それから5人の女子高生がどんな作品づくりを行ってきたのか、興味津々・気持ちわくわくしながら各作品のネーミングやアイデア、苦労した点などを聞きました。

Yaさん(木祖村)は日本文化としてある「けん玉」をヒントにしたおもちゃ作りで、作品名は「新世代のけん玉」です。「どうしたら子どもたちが楽しめるのかを考えて、自分が楽しめることが大事と考え、何回も試作しました」

Yさん(木曾町)の作品名は「はめこみ型パズル」で、「穴の大きさと配置場所に苦労しました」

Uさん(木祖村)の作品名は「スライドパズル」で、「大人も子どもも楽しめるように、いろいろなバリエーションがあるので、遊び方も多様になるようにしました」

Oさん(木曾町)作品名は「ねこの車おもちゃ」で、特徴はかわいい尻尾が動くのがユニークです。

Tさん(大桑村)の作品名は「ジャンピングボール」で、子どもたちから大人まで「ボールを飛

ばして」遊ぶことが出来るようになっています。



いずれの作品もブナの間伐材で作られています。

名古屋市科学館の山田さんからは「『科学』の入り口として、木のおもちゃ作りがあると考えているので、今回のどの作品もデザインの完成度が高いし、実に楽しくて美しい作品になっていると感じます」と話されました。

5つの作品は、2月27日に5人が出席して名古屋市科学館へ贈呈されます。今回で科学館に贈呈された作品は46になります。

今回は、「五人五色」の作品で、子どもたちや親子にワクワクしながら楽しんでいただける作品になっています。皆さん、ぜひ科学館で作品をご覧ください。(2月9日記・事務局 かわさき)

<映 画> アフガンを緑の大地に！・・・「誠実さこそが人々の心に触れる」

アフガニスタンで人道支援を続けてきたNGO「ペシャワール会」の現地代表で医師の中村哲さん（1946～2019）は、2019年12月武装集団に襲われ、銃撃により殺害された。

『荒野に希望の灯をともし』は、その中村さんがアフガニスタンの乾いた大地に用水路を作り、農耕できる土地を作っていた姿を映すドキュメンタリー映画だ。水質の悪さが住民の健康を害していることに気付いた中村さんは井戸を掘り始める。しかし井戸だけでは大地を潤すことはできない。そこで彼は近くを流れる大河クナル川から用水を引くことをおもいつく。

医師であるにもかかわらず中村さんは、シャツ1枚で重機を操り、土を掘り起こし、かさ上げし、住民と一緒に用水路を作っていく。大河の水を取り込むのがうまくいかなければ、自身の地元筑豊にある山



田堰を参考にして成功する。洪水が起きて用水路が崩壊しても修繕・補修をしていく。決してあきらめない姿は叔父の火野葦平の小説『花と竜』のモデルになった祖父で沖仲仕の玉井金五郎を彷彿とさせる。そして、茶色だった大地が、スクリーンいっぱいの緑の大地に変わっていく光景は眩いばかりである。

中村さんは凶弾に倒れてしまったが、アフガニスタンの人々は自らの手で堰を修復し、新たに用水路を作れる技術と

その意義を見出したのだ。中村さんの意思は引き継がれたのである。

「裏切られても裏切り返さない。誠実さこそが人々の心に触れる」

中村哲さんの深いメッセージが伝わってくる優れたドキュメンタリー映画である。 （三田）

<お知らせ>

* 中村哲医師が、2019年12月4日にアフガニスタン東部ジャララバード市内で武装勢力の襲撃を受け、スタッフ1名、護衛4名とともに銃弾に倒れて、5年余の日々が過ぎました。「中村医師が実践してきた事業はすべて継続し、彼が望んだ希望は全て引き継ぐ」とペシャワール会の精力的な活動は、続けられています。

2025年3月9日（日）11時～上映会「荒野に希望の灯をともし」

12時30分～13時30分 休憩（ビデオ上映あり）「干ばつの大地に用水路を拓く」

13時30分～メッセージ 13時45分～講演：ペシャワール会会長・村上優さん

場所：鯉城ホール（伏見ライフプラザ5階・地下鉄伏見6番出口 南へ徒歩7分）

入場料：大人800円

<お出かけください>

* 4月19日（土）9時～15時 木曾町で、小池糶店、七笑酒造、中善酒造店による「春の蔵開き」が開催されます。木曾の発酵文化を満喫してください。

* 5月3日（土・祝）飛騨川流域の「清らかな山里・石のまち」七宗町。新緑の中で山々に木霊する祭囃子の「赤池弁財天まつり」が行なわれます。

* 6月1日（日）第67回「なごや水フェスタ」が名古屋市千種区にある鍋屋上野浄水場で開催され、みん・みんの会は、木祖村のブース内でマルシェを行います。

* 7月12日（土）木祖村の藪原祭りで、山場は14時頃とか！

水源の里を守ろう 木曾川流域みん・みんの会

連絡先：〒464-0075 名古屋市千種区内山3-7-11

携帯電話：090-4150-6156（近藤） F A X：0574-64-4747 mail:suigenosato@gmail.com